

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530975

研究課題名(和文) 高等学校から大学への移行における専門教育・職業教育の有意性

研究課題名(英文) The relevance of vocational education in the transition from high school to higher education

研究代表者

岡部 善平 (Okabe, Yoshihei)

小樽商科大学・商学部・教授

研究者番号：30344550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、職業教育から高等教育への移行において生徒がカリキュラムの有意性をどのように認識しているのか、職業高校2校での縦断的調査に基づいて検討した。「有意性」とは、人が教育内容に付与する意義を意味している。本研究は、教育内容と進路との「関連性」と、職業科目への「関心」を、有意性を構成要素と見なした。

調査の結果、関連性と関心の両者を保持している生徒の割合は高いものの年々減少する傾向にあること、「現在の成績」と「普通科目への関心」が関連性と関心の構成に影響していることが示された。これは、職業高校の生徒が、高等教育への進学を志向する過程で普通科目と職業科目を関連づける傾向にあることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to examine how students perceive the relevance of the curriculum in the transition from vocational education to higher education, based on the results of a longitudinal survey conducted at two vocational high schools. Relevance means the importance given to educational content by individuals. This study considered 'relation' and 'interest' as a pair of axes constructing the relevance: the relation between educational content and students' career perspective, and their interest in vocational subjects.

From the research it was demonstrated that the prevalence of students who maintained both interest and relation remained high but declined year over year, and that 'current academic record' and 'interest in general subjects' influenced construction of both interest and relation. It can be inferred that the division between general and vocational subjects tends to weaken among students who intended to go to higher education from vocational courses.

研究分野：教育学

キーワード：高等学校 専門教育・職業教育 カリキュラム 有意性 高等教育

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、相互に関連する二つの研究動向、すなわち「教育内容の職業的意義の再構築」と「高校教育における普通教育と専門・職業教育の分断」がある。

(1) 教育内容の職業的意義の再構築

若年無業者、非正規雇用者、および新規学卒者の早期離職率の増加に伴い、学校から社会への円滑な移行を実現するための専門・職業教育の充実、学校の教育内容の「職業的意義」の向上に対して関心が高まっており、専門・職業教育の現状に関する実証的なデータの提示もなされつつある。

一方で、大学進学率の上昇と高卒労働市場の縮小により、高校における専門・職業教育の役割、位置づけは再考を迫られている。高等教育への進学志向の高まりが専門・職業教育の有意性を見失わせるメカニズムについては、主に教育社会学の領域において研究の蓄積がなされつつある。しかし、その研究の焦点は、学校と労働市場および高等教育との制度的な接続関係の分析に当てられることが多く、大学進学希望者および進学者が専門・職業教育の有意性をどのように認識し、意味づけているのかについては実証的な研究がなされていない。

(2) 高校教育における普通教育と専門・職業教育の分断

上記の研究課題は、高校教育における普通教育と専門・職業教育との関連性の問題と結びついている。

普通教育と専門教育を併せ施すという高校教育の「目的の二重性」をどのように実現するかについては、これまでも議論がなされてきた。しかし、この2種の教育が有機的に関連づけられることは少なく、むしろ分断される傾向にあった。こうした普通教育と専門・職業教育の分断は、アカデミックな教育と非アカデミックな教育の序列に関する教育関係者の認識形成、すなわち「知識の階層化」に影響を及ぼしていると指摘されている。とりわけ、職業教育をはじめ非アカデミックと見なされる教育から高等教育へのアクセスの困難については、その実態の把握が試みられつつある。

2. 研究の目的

上記の背景および問題関心にに基づき、本研究では、高等学校での専門・職業教育が学習者の進路形成に対してもつ効果について、事例分析に基づいて実証的に検討することとした。とくに本研究では、職業学科からの高等教育への進学に焦点を当て、進路選択過程で生徒が専門教育・職業教育に付与する意味を解明する。本研究では、この「生徒が専門教育・職業教育に付与する意味」を「専門教育・職業教育の有意性」として捉え、高校から高等教育への移行期でのその特徴を明ら

かにすることで、後期中等教育カリキュラムにおける専門教育・職業教育研究のための基礎的資料を提示する。具体的な研究目的は、以下のとおりである。

(1) 進学重視型の専門学科、専門学科の進路多様校を調査対象として選定し、高等教育への進学に対する取り組みの実体を事例的に分析する。具体的には、進学対応とは異なる教育課程から高等教育にアクセスする上でどのような困難があり、それに対してどのような対応がとられているのかについて、教育課程、指導計画、生徒および教員への聞き取り調査等を通して検討する。

(2) 大学進学希望者による専門・職業教育への意味付与の特徴を調査する。すなわち、学習活動および進路選択の過程で生徒が専門・職業教育をどのように意味づけ、また、専門・職業教育での経験が生徒の進路展望の形成にどのように作用しているのかについて、時系列的な調査により明らかにする。

以上の分析を通して、高校から高等教育への移行における専門・職業教育の位置づけと役割を、学習者による「教育内容の有意性の認識」の観点から明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、専門教育・職業教育から高等教育への移行に関する理論的枠組の検討、および事例校における調査・資料収集によって、研究目的の達成を図る。

(1) 専門教育・職業教育から大学への移行に関する理論的枠組の検討

本研究の理論的枠組は、その出発点を高校と高等教育の移行・接続に関する研究と、教育内容の職業的意義に関する研究に置いている。

高校と高等教育の移行研究については、英米の教育社会学研究、カリキュラム研究において実証的研究が進められている。とくに英国においては、職業教育・職業訓練から高等教育への移行に焦点を当てた調査研究が蓄積されつつある。日本においても、高校と高等教育の制度的な接続の仕組みに着目し、その仕組みが円滑な教育接続に対して有効なものとなっているのかに関する実証的な研究がなされている。また、教育内容の職業的意義の研究については、学校から職業への適応過程における専門・職業教育の効果および専門・職業教育の実施形態について、日本と諸外国との比較を踏まえた分析がおこなわれている。

本研究では、これら両研究分野からの知見を比較検討し、高校から高等教育への移行・接続の既存の制度的枠組のなかで、高校の専門・職業教育が学習者の進路形成に対してどのような効果をもちうるのか、そうした効果

がどのような過程で学習者に認識されうるのかについて検討する。この理論的検討から導き出される視点を、本研究では「専門教育・職業教育の有意性の認識過程」の分析枠組として整理する。

(2) 事例校における調査研究

本研究の調査は、専門・職業教育の大規模な実態調査ではなく、理論構築のためのデータ収集の意味合いをもつ。本研究では専門・職業教育の有意性に関する学習者の認識を、その形成過程まで視野に入れて検討するために、事例分析の手法を用いた時系列的なデータの収集をおこなう。すなわち、

独自に選定した職業学科において、大学への進学に対する取り組みの実態を、生徒および教員への聞き取り調査や資料分析を通して検討する。対象校は5校で、北海道地区2校、関東地区2校、関西地区1校。北海道地区と関東地区については商業科を主体とした高校、関西地区については工業科を主体とした高校である。

高校の専門・職業教育が学習者の進路形成に対してどのような効果をもち、その効果がどのような過程で認識されるのかを検討するために、生徒の進路展望と学習活動に関する質問紙調査を実施する。本研究では、次の2校を調査対象校として取り上げる。

・A校：進学重視型の専門学科。商業科、情報科、国際文化科、普通科を併置。

・B校：商業科の進路多様校。会計、情報、国際の3コースを設置。

本調査研究では、上記2校の2010年度の1年次生を調査対象とし、1年次から3年次までの生徒集団の変化を各年度の調査から得たデータを使用して縦断的に分析するよう図った。調査の実施時期、有効回答者数は以下のとおりである。

第1回調査：2011年2月実施。318名。

第2回調査：2011年11月実施。337名。

第3回調査：2012年12月実施。366名。

なお、本研究ではとくに職業教育のカリキュラムに対する生徒の認識に焦点を当てるため、調査対象校のうちA校の普通科および国際文化科を分析から除外することとする。また、調査1年目に関してのみ比較対象として普通科1校において同様の調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 進学重視型の専門高校、および専門学科の進路多様校における職業教育の実施状況とカリキュラム編成の特徴について、北海道地区2校、関東地区2校の職業学科での授業見学および教員への聞き取り調査を実施した。調査から、以下の点が明らかになった。

科目選択制を導入し、12~16単位の範囲で普通科目と専門科目のいずれかを選択できるカリキュラムの構成となっている。これにより原則25単位の専門科目数を確保しつつ普通科目を履修しやすくし、職業学科の枠組

みの維持と進学希望者への対応の両立を図っている。

英語教育およびキャリア教育の重視、資格取得の非強制、大学等との連携授業と通して職業教育の活性化を図っている。

推薦入試の利用を中心とした進学指導体制をとっている。

(2) 高校から高等教育への移行において、生徒が「職業教育の有意性」をどのように認識しているのかを分析する枠組みとして、本研究では先行研究の知見を踏まえ、次のふたつの視点を設定した。

現在学んでいる教育内容と進路との「関連性」：生徒は、現在学んでいる職業教育の内容と高等教育機関での希望分野とをどのように関連づけているのか。

「職業教育から高等教育への進学」の主要な論点は「カリキュラムと進路との対応関係の変化」にある。しかし、これは「進学か就職か」という大枠での対応関係の変化を表しているに過ぎず、もし高校での専門分野 商業、工業などと進学先での専攻 経営学、工学などが関連していれば、一定の対応関係が維持されていることとなる。現在学んでいる職業教育の内容と進学希望分野がどのように関連づけられているのか。これが第一の視点となる。

職業学科および科目に対する「関心」：生徒は、現在学んでいる職業教育の内容に対してどの程度コミットしているのか。

生徒の進路選択は、現在の学習内容と進路との「関連性」に基づく合理的な選択であるとは限らない。むしろ、漠然とした興味や関心から教育内容にコミットし、その結果として特定の進路展望が形成される可能性がある。すなわち、教育内容と進路との「関連性」に先行するかもしれない、教育内容への「関心」の在り様にも着目する必要がある。生徒は、職業教育・科目に対して独自の「関心」を形成しているのか、が第二の視点となる。

(3) A校およびB校での時系列的調査において、まず生徒の「関心」と「関連性」の分布およびその変化を検討した。調査では、職業科目に「どれくらい興味をもって取り組んでいますか」という質問項目への回答を「関心」の、「現在学んでいることを生かすことができるような学校や分野に進学したい」という質問項目への回答を「関連性」の指標として用い、いずれも4段階評定の形式で尋ねている。その結果明らかになったのは、以下の点である。

「関心」について、75%以上の生徒が職業科目に「興味をもっている」と肯定的に回答し、その割合に学年間の有意差は見られない。

それに対して「関連性」については、1年次から3年次を通して75~55%の生徒が現在の教育内容との関連分野への進学を希望している一方、学年が進むにつれて「当てはま

らない」と否定的に回答する生徒の割合が有意に増加している。

ここから、進学希望の生徒にとって、「職業教育の有意性」は即時的な関心の充足という点では維持されているが、将来との関連性という点では否定の方向にシフトしている、ということができる。

(4)「関心」と「関連性」の肯定・否定の組み合わせから、4つの類型を「有意性の認識タイプ」として作成した。図1は、「関心」を横軸、「関連性」を縦軸に配置して(いずれも肯定=+、否定=-)生徒の「有意性の認識タイプ」を分類し、さらにその学年ごとの分布を示したものである。

		「関心」	
		+	
「関連性」	-	+ - 型	+ + 型
			1年次：15.5 2年次：25.9 3年次：28.7
		+	
「関連性」	+	- - 型	- + 型
		1年次：9.5 2年次：14.1 3年次：15.2	1年次：10.0 2年次：8.0 3年次：8.5

図1「有意性の認識タイプ」の分布と分類(%)

これを見ると、「関心=肯定・関連性=肯定」の++型は3年間を通してもっとも割合が高くなっているが、学年の進行に伴って有意に減少する傾向にあることがわかる。それに対して、「関心=肯定・関連性=否定」の+-型、「関心=否定・関連性=否定」の--型の割合は一貫して増加する傾向にある。とくに、1年次から2年次にかけての+-型の増加は顕著である。このことから、1年次において++型であった生徒の一定層が、+-型あるいは--型にその有意性の認識枠組を変容させていると考えられる。

(5)各認識タイプの生徒が具体的にどのような分野への進学を希望しているのかについて調べた結果、以下の点が明らかになった。

1年次の4大・短大希望者のうち++型の生徒の割合は70%に及んでおり、他の認識タイプと比べて顕著に高い。しかし、2年次ではその割合は56%となり、有意に減少している。専門学校希望者については、+-型の割合が3年間を通じて相対的に高くなっている。このことから、大学進学を希望する過程で「関心」と「関連性」の両者を維持することを困難にする何らかの要因が存在する、と推察できる。

とくに+-型の生徒において、進学を希望する分野が3年間を通して分散する傾向が見られた。さらにその内容を見てみると、「芸術系」「理容・美容系」「食物・栄養系」とい

った、必ずしも学業成績を要求されない非メリトクラティックな領域が選択されていた。このことから、生徒にとって「現在の学習内容とは関連しない進学分野」とはこれら非メリトクラティックな領域を意味している、と考えることができる。

(6)職業学科から高等教育への進学における生徒の「有意性の認識タイプ」の規定要因を検討するために、調査では「有意性の認識タイプ」を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析をおこなった。分析では、4つの「認識タイプ」のうち少数で傾向の安定しない+-型を除外し、--型を基準として++型と+-型の生徒がどのような特徴をもつか明らかにするよう図った。その結果明らかになったのは、以下の点である。

++型と+-型のいずれの生徒も「普通科目への関心」が高い。++型の形成については、他の要因を統制しても3年間を通して「普通科目への関心」が有意な効果をもっている。+-型についても、2年次以降5%水準で有意な効果を及ぼしている。

++型の形成については、「現在の成績」がとくに2年次以降強い影響力を及ぼしている。+-型では2年次以降「現在の成績」の明確な影響力を見いだすことはできない。

以上の結果から、職業学科から高等教育への進学において職業科目への即時的な「関心」と進路との「関連性」をともに維持している生徒は、職業科目と並んで普通科目に対してもコミットメントを示し、かつ一定の学業成績を収めているという特徴をもつことがわかった。高等教育への進学希望者において、普通科目と職業科目は強い分類によって疎隔されているものではなく、むしろ普通科目へのコミットメントが職業科目への関心を促進する傾向にあった。同時に、進路達成の手段としての「成績」を維持することが、現在の学習経験を進路へと関連づけるうえでの必要条件となっていると考えられる。

興味深いのは、+-型の生徒が示しているように、進路達成の手段としての「成績」という要件が満たされていない状態にあっても職業科目に対する即時的な「関心」は維持される場合がある、という点である。この場合、生徒は、職業科目そのものには肯定的に関与しながらそれを具体的な進路に結びつけるための手段を欠いた状態、換言すれば一種のアノミー状態に置かれていると解釈することができる。

(7)専門学科・職業学科からの高等教育への進学は、一方でこれまであまり進学を考えてこなかった層の生徒による高等教育への参加拡大を、もう一方で職業教育カリキュラムと進路との対応関係の変化を表している。とくに後者については、「普通教育と専門・職業教育の分断」の再構築として捉えることができるかどうか争点となる。本研究の分

析では、職業学科からの進学希望者の職業科目への関心が普通科目へのコミットメントによって促進されることが明らかになった。この結果から、生徒が普通教育と職業教育とを同様に関心の対象として価値づけていく、その萌芽を読み取ることができる。しかし一方で、この職業教育への関心がさらなる学習の基盤として十全に機能するためには、学業成績等のメリトクラティックな条件をクリアしなければならない。この条件を欠いた場合、生徒の職業教育への関心は、進路とのつながりをもたない即時的な欲求充足に収斂していくことが考えられる。

(8) 職業学科からの進学希望者が今後一定の数的規模を保つとするならば、また職業教育が就業に直結するという役割を後退させるとするならば、専門教育・職業教育はどのような方向性を取り得るのか。本研究の分析からは、次の二つの方向性を仮説的に導き出すことができる。

職業教育の普通教育へのシフト。具体的には、職業学科において職業的な教育内容に充てる時間ないし単位数を一定程度切り下げ普通科目の時間に充てる、あるいは職業科目の内容に抽象的、原理的な内容を多く取り入れる、といった方法である。++型の志向性の規定要因として「普通科目への関心」と「学業成績」が正の効果をもっていたことを考えると、職業学科において普通教育の割合を高くし、それへの志向性を強めることには一定の意義がある。また、職業学科の出身者が大学等で直面することが予想される、学力不足に起因する不適応やドロップアウトにも対応が可能となるであろう。

職業学科において形成される多様な能力を可視化し、それを積極的に評価していくという方向性。すなわち、職業教育の過程で形成される(形成されることが期待される)思考力、知識の活用力、コミュニケーション能力などの一般的汎用的な能力を、コースワーク等を通して測定し、共通の能力指標に基づいて評価していくという方向性である。これは、特定の職業的知識・スキルに関する「内容ベースの職業教育」から、教育の過程で形成されるジェネリックな「能力ベースの職業教育」への意向を表している。換言すると、この方向性は、共通の評価基準を設けることでアカデミックな教育と職業教育を同等に評価しようという発想である。

(9) これら二つの方向性のうち、とくに後者の観点から後期中等教育における専門教育・職業教育の有意性を再検討していくことが、今後の課題となる。職業教育を通して形成される多様な能力を適切かつ客観的な形式で可視化することには、評価手続の開発と実施という点で常に技術的、コスト的な問題が付きまとう。また、職業教育を通して形成される能力をアカデミックな能力と同等な

ものとして位置づけるための枠組みをどのように制度的に構築し、整備するのかという点が検討されなければならない。

本研究では、関西地区の工業高校を事例に、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価による、生徒の職業的能力の質的評価の試みを検討した。この事例においては、生徒の技術的能力だけでなく、職業教育の過程で用いられる思考力や問題解決能力等についても評価の観点を設定し、把握することが試みられていた。また、こうした観点を生徒にも明示することで、学習の指針としても機能することが図られていた。

今後はこうした事例を蓄積し、比較検討をおこなうことが求められるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

岡部善平、専門学科における「カリキュラムの有意性」と進路展望 進路および学年による生徒の認識の差異に着目して、小樽商科大学 人文研究、査読無、125 輯、2013、25-55

岡部善平、専門学科から高等教育への進学における「教育内容の有意性」の認識 普通科との比較の視点から、小樽商科大学 人文研究、査読無、122 輯、2011、85-107

[学会発表](計 2 件)

岡部善平、専門学科から高等教育への進学における「カリキュラムの有意性」の認識(2) 縦断的調査に基づく検討、日本カリキュラム学会 第 25 回大会、2014 年 6 月 29 日、関西大学

岡部善平、専門高校における「教育内容の有意性」の認識と進路展望 商業科での質問紙調査に基づいて、日本子ども社会学会 第 20 回大会、2013 年 6 月 30 日、関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部 善平 (OKABE, Yoshihei)

小樽商科大学・商学部・教授

研究者番号： 30344550